

A Study of Teaching Eurhythmics to Differently Aged Children

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮崎, 真利子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1251

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



異年齢児のリトミック指導に関する一考察

A Study of Teaching Eurhythmics to Differently Aged Children

宮崎 真利子

MIYAZAKI, Mariko

1. はじめに

日本に於けるリトミックは、早期音楽教育のひとつとして、盛んに幼児教育の中で取り入れられている。最近では、ピアノやヴァイオリンを習わせる前の音楽教育として、0歳児や1歳児がリトミックのレッスンを受けることは、珍しいことではなくなった。そして、低年齢化にともない、各年齢に対応したメソッドも確立されてきた。

しかし、近年は少子化の影響で、異年齢が混在したクラスでリトミック指導をする機会が増えてきた。わずか数ヶ月の月齢差でも、各々の子どもたちの身体や特徴が異なるため、ある特定の年齢に向けたねらいを定めた、画一的なレッスンをするのは難しい。それでは、身体能力や言語能力が異なる乳幼児に対

して、どのようなことに配慮しながらレッスンを進めていけば良いだろうか。

本稿では、筆者がリトミック指導を担当した音楽教室と、保育園の2つのケースから、指導においての問題点を明らかにする¹⁾。そして、子どもの音楽的な発達段階や、リトミックの指導指針から、異なる年齢の子どもたちにどのように指導するべきかを考察する。

2. 異年齢児指導における問題点

2-1. 親子参加型の異年齢児指導

親子参加型の異年齢時指導では、どのような問題が起こるのだろうか。2018年8～9月の東京都内の音楽教室で1～3歳児を対象に行ったレッスンを例に、問題点を挙げる。

まず、生徒の内訳は【表1】の通りである。レッスンは新年度の4月より、A～Eまで

【表1】受講者について

生徒	年齢 (2018年8月時点)	性別	リトミック歴	参加する兄弟 (年齢)	備考
A	3歳0ヶ月	女	1年半程度	なし	発表会に参加
B	2歳8ヶ月	男	1年半程度	姉(7歳)	発表会に参加
C	2歳4ヶ月	男	6ヶ月	なし	
D	2歳4カ月	女	4ヶ月	兄(5歳)	
E	1歳11ヶ月	女	4ヶ月	兄(5歳)	
F	1歳4ヶ月	女	1年未満	なし	8月より同年齢クラスより移動

キーワード：リトミック、音楽教育、幼児教育

Key words : eurhythmics, musical education, early childhood education

の5名の生徒が、毎週土曜日、同じメンバーで月3回レッスンを受講していた²⁾。この教室では受講者の兄弟も参加可能であり、D、Eの兄弟が同伴の際は参加していた。Bの姉は、リトミック経験者のため、Bの母親役となって参加することもあった。

8～9月のレッスンは、9月下旬の発表会の準備のためのレッスンを中心に行っていた。そこに、生徒Fが、8月より曜日移動で1歳児クラスから移動してきたため、1歳から7歳までの子どもたちが、同じレッスンに参加している状態であった。

【表2】は、2018年8～9月に主に行った活動である。指導は、当時クラスの人数の割合が多かった2歳児の指導教本の指導内容を基本として行った。

八分音符、四分音符、二分音符のステップは、2018年4月から7月まで段階的にレッスン中に取り入れて活動をしてきた。衝突や転倒の危険性を考慮し、特に1～2歳半の生徒D、E、Fには、八分音符のステップを、親が生徒を抱いた状態で活動してもらった。子どもを抱きながら歩く親の負担も考え、「おやすみの音楽」で、休憩を適宜入れながら活動を行なった。「音のエレベーター」は、4月のレッスン開始時から毎回行っていたが、手を繋がずに、「抱いた状態でも構わない」と伝え、活動してもらった。また、兄弟がいる生

徒は、兄弟同士で手を繋いで活動をしているところもあった。

この活動を、「抱いた状態で活動しても良い」と伝えたことにより、本来歩けるはずの生徒まで、親に抱いてもらうことを要求するようになった。本来、音価の聞き分けができるAは同伴する父親に抱くことを要求し、拒否をすると泣いてしまい、その後の活動が続けられなくなることもしばしばあった。また、Bは歩くことを拒否し、母親が抱きかかえて歩くことが多かった。この行動は、土曜日のクラスだったということが原因ではないかと考える。両親が共働きで、平日親子との交流を取る時間が少ないため、他の子どもが抱かれているのを見ると、自分も甘えたくなくなってしまっているのではないだろうか。しかし、発表会の1週間前のレッスンになると、発表会に出演するという自覚を持つようになり、AとBは自分でステップができるようになっていった。また、この期間中、C～Fの中で、音価を聞き分け、ステップができるようになったのは、Dであった。Dと一緒に参加する母や兄の様子を見ながら、徐々に音価を聞き分けられるようになっていった。周りの生徒の様子を見て、上達したのではないかと考える。

「りんご狩り」は本来2歳児の活動であり、「とって」でりんごを掴み、「入れて」でとりんごをカゴに入れ、「2拍子を感じる」こ

【表2】 レッスン内容

活動項目	活動内容
マーチ	マーチの音楽に合わせてJのステップを歩く（四分音符のステップ）
音のエレベーター	親子で両手を繋いで、手で高さをつけながら階名唱をする
熊のお散歩	二分音符のリズムを感じて歩く（二分音符のステップ）
リスのお散歩	♪のリズムを感じて歩く（八分音符のステップ）
おやすみの音楽	子守唄を聞かせながら休む活動
りんご狩り	↓ ↓ ↓ ↓ とって いれ て と言いながら、りんごを取る"

とを目的としている。指導書では、りんごは見立てて取るが、実際の指導では、発表会ということもあり、紙で製作したりんごを地面に撒き、各自にカゴを持たせて、実際にりんごを拾える状態にした。

8～9月の間に、音楽に合わせて「とって 入れて」が出来たのはAとDであった。Bは、たくさんりんごを獲って、カゴに入れる作業に夢中になってしまい、音楽を聴いていなかった。C、E、Fは「とって 入れて」の作業を楽しんでいたが、CとEの母親が子供に「とって 入れて」を音楽と合わせて活動させようとしている動きが見られた。

親子参加型のクラスでは、クラスの最年少の活動レベルに合わせてしようとすると、年長の子ども達が親に甘えはじめ、本来こちらが意図している活動をしなくなる。それに対して、クラスの年長のレベルに合わせた活動を行うと、最年少の生徒の親が自分の子どもに正確な活動をさせようとする様子が見られた。

2-2. 保育園での異年齢児指導

保育園での異年齢児クラスでは、どのような問題が起こるのだろうか。2018年度から指導した東京都内の保育園の3～5歳の混合クラスで、週1回30分間の指導をした。全員リトミックを受けるのは初めてであった。

2018年度のクラス構成は以下ようになっていた。

【表3】2018年度のクラス構成

年齢	女 (人数)	男 (人数)
3歳児	3	5
4歳児	2	0
5歳児	0	1

2018年度のレッスンでの導入のひとつとして、次のような活動を行っていた。

【表4】2018年度のレッスン導入部分

活動	活動内容
おへんじ	指導者が2音の全音音程を取りながら「○○ちゃん(くん)」と呼びかけ、同じ音程で「はあい」と返事をする。 先生：♪♪♪ ○○ちゃん 生徒：♪♪♪ は あ い

「おへんじ」は3歳を想定した活動であるが、4歳、5歳児には、呼びかけの声に強弱や速さを変えながら活動を行った。この活動を始めた初期は、5歳児は正しい音程とリズムで「はあい」と返事をしていていたが、活動に慣れてくると「はあい」の代わりに、「トマト」と、全く別の言葉を使って返事をようになった。この返答に、3歳の男児たちが面白がり、「トマト」と使うようになった。「おへんじ」をする代わりに好きな野菜や果物を言うという活動に切り替えることもあったが、年度の後半はこの活動に於いては、「はあい」と返事をする男児がほとんどいなくなってしまった。このように、5歳にとって容易に感じる活動は、指導者が予期できない別の活動へと変化し、他の幼児に影響を及ぼすことがある。

2019年度になると、クラスの構成が以下ようになった。

【表5】2019年度のクラス構成

年齢	女 (人数)	男 (人数)
4歳児	2	5
5歳児	2	0

クラス構成は前年度の持ち上がりで、昨年度より2名減少したが、転入もなかったため、2018年度とほぼ同じクラスメイトとのレッスンとなった。全体の平均年齢も上がったため、4歳の指導書を中心にレッスンを行なった。

新年度からは、毎回の導入の一つとして、

4月から7月までド～ミまでの、ハンドサイン³⁾を使った活動を行なった。

【表6】ハンドサインを使った活動の一例

<p>1. ハンドサインを歌いながら確認する 「ドードーミ」 ド＝両手を膝に置く ミ＝両手を交差して肩に置く</p> <p>2. スキップをしながら「ドードーミ」が聴こえてきたら、ハンドサインをしながら「ドードーミ」と歌う。</p>
--

この活動を始めた当初は、4歳児は、正しい音程で歌うことができるものの、正確なハンドサインを示すことができなかった。しかし、5歳児のうちの一人がハンドサインを早く覚え、クラスをリードする存在であったため、4歳児はその幼児の動きを真似てハンドサインを行っていた。7月に入っても、4歳児は5歳児の動きを見ながら真似をするため、4歳児のみにハンドサインをさせたが、ほとんどがハンドサインができるようになっていた。

4歳児のハンドサインの習得は、3ヶ月間の経験の積み重ねによるものが大きい、5歳児の及ぼした影響は大きい。

このように、クラス内の年長者の活動の一挙一動が、年少者の活動に影響を及ぼしていることが見えてくる。

3. 異年齢児指導への指導計画

3-1. 子どもの音楽的な発達段階

子どもは音楽的にどのように発達していくのであろうか。仲野による、保育所保育指針に沿った8段階による「子どもの音楽的な発達」の分類表から、対象となる年齢部分を一部抜粋した⁴⁾【表7】。

楽器の演奏において、1歳までは「音の出る玩具」を「いじって遊ぶ」が、2歳になると、音楽に合わせて「楽器」を「鳴らす」ようになる。そして、4歳になると、メロディーやリズムに気をつけて「合奏を楽しむ」ようになり、5歳以降は、アンサンブルでの演奏に気を配れるようになる。このように、楽器の演奏において、年齢別にできることが異なるため、それぞれの目標を定めて活動を行いたい。

では、音楽と身体の動きは、成長とともにどのように変化していくのだろうか。6ヶ月から1歳3カ月未満では、音楽に合わせて「手足」を動かし、1歳3カ月から2歳未満では音楽に合わせてリズムカルに「身体」を動かす。そして、2歳になると、音楽に合わせて走ったり身体を振ったりしてリズムを楽しめるようになる。さらに3歳になると自分の意思で身体を表現することができるようになってくる。このように、0～3歳の間で、身体で表現できることは異なり、音楽を使いながら身体を動かす場合も、各月齢や年齢でできることを理解した上で活動を行うことが求められる。

また、音楽で感じたことを、独自の表現に繋げていくために、3歳ぐらいになるまでは、繰り返し音楽を聴き、大人と一緒に活動しながら経験していくことが必要である。保育者は、2歳までは好きな歌や音楽を繰り返し聴かせたり、歌わせたりすることを推奨している。3歳頃になると、自分自身で表現ができるようになってくる。4歳で強弱やニュアンス、テンポの変化に対応できるようになり、5歳以降は徐々に自分の思い通りの表現ができるようになってくる。この表現力をさらに高めるために、保育者にはイメージを広げる

異年齢児のリトミック指導に関する一考察

【表7】 仲野による「子どもの音楽的な発達」(一部抜粋)

年齢	子どもの音楽活動	保育者の援助
1歳3ヶ月未満から6ヶ月から	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者の歌を楽しんで聞く。 ・歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しむ。 ・音の出る玩具を見つけ、自分で音を鳴らして楽しむ。 ・保育者やほかの子どもがしている音遊びを、同じようにまねて遊ぶ。 ・テレビなどから流れてくる音楽に合わせて手足や体を動かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者は日ごろの生活の中で、優しい歌声を豊富に聞かせる。 ・CDやカセットテープなどを利用して、快い音楽を聞く機会を豊富にする。 ・気に入った歌や音楽を繰り返すようにし、子どもに満足感を与える。 ・保育者が子供と一緒にできる音遊びを工夫し楽しむことにより、大人の動作を模倣する喜びを味わえるようにする。
2歳未満から1歳3ヶ月から	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者と一緒に楽しく歌う。 ・保育者と一緒に簡単な手遊びをして楽しむ。 ・音楽に合わせてリズムカカルに身体を動かしたりして遊ぶ。 ・音の出る玩具などに興味を示し、いじったりして遊ぶ。 ・好きな音楽を繰り返し聞いたりして楽しむ。 ・興味のある歌の一節を不安定ながら歌ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者は、日ごろの生活の中で優しい歌声を豊富に聞かせたり、一緒に歌って楽しむ。また手遊び歌を利用しながら指や手足をリズムカカルに動かすようにする。 ・手に持ちやすい、安全な、音色の美しい玩具・楽器を身近な所に置く。 ・CDやカセットテープなどを利用して、快い音楽を聞く機会を豊富にしたり、興味ある音楽を繰り返して聞かせるなど、子どもの状況を的確に把握し対応する。
おおむね2歳	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者と一緒に全身や手指を使い、歌いながら手遊びを楽しむ。 ・音楽に合わせて走ったり・身体を振ったりしてリズムを楽しむ。 ・保育者と一緒に表現して楽しむ。 ・なんども聞く歌を自然に口ずさんで歌うことがある。 ・音楽に合わせて楽器を鳴らし、音やリズムを楽しむ。 ・気に入った音楽をなんども繰り返し聞いたり歌ったりすることを好む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・模倣やごっこあそびの中で、保育者は一人ひとりの気持ちを受け止めて、仲立ちや援助することにより、遊びや音楽活動を発展させる。 ・日常の保育の中で子どものつぶやきやしぐさを的確にとらえ、一緒に共感しながら表現する。 ・大きな声・無理な発声には注意し、正しく、美しく聞こえるようにながす。 ・子どもの好きな、優しい歌を何度も繰り返しながら一緒に歌う。
おおむね3歳	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思で歌ったり、身体で表現したりして楽しむ ・歌のメロディーを覚え、ゆっくりであるが歌詞もはっきりと歌える。 ・簡単なメロディーを即興的に口ずさむことがある。 ・一人で喜んで歌う。 ・擬声などの言葉遊びを楽しむ ・音の出る楽器などに興味を示し、いじったりして遊ぶ。" 	<ul style="list-style-type: none"> ・心身ともにめざましい発育・発達を示すが、自分をうまく表現できないこともあるため、一人ひとりの発達に目を向けた丁寧な対応が必要である。 ・さまざまな音の素材・楽器などを身近に起き、音を楽しんだり、メロディーに合わせてリズムを売ったり、いろいろな動きをまねて表現する活動を発展させる。 ・音楽活動の萌芽の時期でもあるので、一人ひとりの子どもの興味や自発性を大切に、表現しようとする意欲をより引き出すための絵本や手遊び歌などで、興味を持ったことを一緒に共有しながら遊ぶようにする。
おおむね4歳	<ul style="list-style-type: none"> ・身体表現においては全身のバランスも良くなり、リズムカカルに歩いたり、スキップやダンスもできる。 ・歌う意欲が盛んになり、みんなでそろって歌うことを好む。 ・動きを伴って音楽を聞くことができるようになったり、リズムカカルに楽器を演奏することができるようになる。 ・簡単な歌を遊びながら作ったりする。 ・音楽的能力も発達し、正しいリズムや音程も理解できる。 ・強弱の比較、テンポの変化にも対応できる。 ・手や指の運動はより巧みになり、手遊び歌なども仲間と一緒に楽しむ。 ・メロディーやリズムに気をつけて楽器を鳴らしたり、合奏を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との関係や集団生活の展開に留意する。 ・CDやカセットを利用していろいろな音楽を鑑賞したり、音楽に合わせて一緒に動きを付けてみる。 ・保育者自身が音楽を楽しみ、生活態度もリズムカカルであり、音に対して敏感であることが大切である。 ・生活の中に歌・手遊び・楽器など素材を豊富にしておくとともに、仲間と一緒に活動できるように配慮する。 ・表現する意欲や創造性を豊かに育てるために、視聴覚教材や絵本などをたくさん見たり聞いたりして、イメージを広げる経験を多く取り入れる。
おおむね5歳	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽的要素(音の高低・強弱・速度・表紙など)を身体で感じ取ることができ、歌う、楽器を弾く、身体で表現するときにうまく取り入れることができる。 ・身体的運動も無駄がなくなり、音楽に合わせて表現することができ、自分の思いや考えを表すことがよくなる。 ・自由表現するときは、表現の仕方を工夫したりする。 ・仲間と一緒に活動するときはなるべくそろえるように気をつけ、自分のパートを間違わないように気を配り、表現することの楽しさを理解し始める。 ・テレビのアニメソングなどをよく覚え、楽しく歌える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの表現しようとする気持ちを大切に、個々の表現を認める。"子どもたちの表現しようとする気持ちを大切に、個々の表現を認める。 ・みんなで一緒に表現するために、相手の表現を容認し合い、協力し合って作り出す喜びを感じさせる。 ・生活の中でさまざまな音に注意を向けさせる。 ・友達などの表現を見たり、良い音楽を鑑賞させたりして、やりたくなるように環境を整える。 ・リズム楽器など合奏することの楽しさを感じさせるために、楽器の弾き方指導や興味の持てる曲の紹介などに配慮する。
おおむね6歳	<ul style="list-style-type: none"> ・歌うこと、合奏すること、身体で表現することも自分の思いのまま発揮でき、楽しむ。 ・合奏するときにも自分のパートに責任が持てる。 ・好きな曲を1人で歌ったり、友達同士一緒に歌うことがある。 ・動きがとてりリズムカカルになり、いろいろなリズムを身体で表現しながら歌うこともできる。" 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現しようとする意欲を持たせるための音楽環境を整え、保育者自らも楽しむ。 ・友達とのかかわりがスムーズに流れるように、一人ひとりの状況を確認し認める。 ・リズム楽器など、ある程度の数を保育室に置いておき、自由に使えるようにしておく。 ・CDやカセットテープなどの使い方を理解させ、自由に利用できるようにしておく。"

経験を多く取り入れることを求めている。

このように、年齢別の楽器の演奏能力や身体能力、表現方法を理解しながら、個々の表現を見つけ出し、活かすことが、指導者には求められる。

3-2. リトミックの指導システムにおける指導指針

では、リトミック⁵⁾では、どのように指導指針を設けているのだろうか。

【表8】の指導指針を見ていくと、ねらいとして使われている言葉が、年齢によって類似している。1歳では「慣れ親しむ」や「慣れる」、2歳で「経験する」、3歳では「めばえを促す」が頻繁に使われている。4歳は「基礎」、5歳で「向上」という言葉が見られる。このねらいとなる言葉を、親子参加型のクラスで、親に絶えずかけることが必要なのではないだろうか。例えば、2歳児の活動を1歳がする場合、「慣れましょう」と親に言葉がけをただけで、親は気後れすることなく子ど

もと一緒に活動することができるだろう。

3-3. 異年齢児指導時の指導計画

年齢児クラスを指導する際に問題になるのは、それぞれの活動の目標や目的が異なるために、同じ活動をしていても、クラス全体の動きに一貫性がなくなってくることである。幼児それぞれの個性を活かしながら活動するためには、どのような工夫が必要だろうか。ヴァンドレスパーは、「教師が作ってしまうかもしれない妨げ」⁶⁾を以下のように挙げている。

- ・くどくどとした長すぎる言葉による説明
- ・レッスンを難しすぎたりやさしすぎたりする場合
- ・進めかたが速すぎて、理解できない場合
- ・進めかたが遅すぎて、はずみが見つからない場合
- ・子供達を混乱させるような誤った構成のレッスン

【表8】リトミック研究センター《指導システムにおけるStep1～5の指導指針》

	Step1 (1歳)	Step2 (2歳)	Step3 (3歳)	Step4 (4歳)	Step5 (5歳)
生活・力	お母さんとのいろいろな“あそび”を通じて、教室環境に慣れ親しむ。	身近な生活体験を、親子の触れ合いを通じて音楽遊びに再現し、経験する。	先生やお友達との触れ合いを通して、様々な基本的能力の“めばえ”を促す。	身の回りの出来事を、音やリズムとして感覚的に捉え、豊かな自己表現の基礎作りとする。	表現する喜びを深めることにより、各種能力の向上を促し、自己の健全な確立を目指す。
音楽	音楽の流れている環境に慣れ親しむ。	いろいろな音楽に触れ、速さ、強さ、高さのつがいを体験する。	生活に密着した模倣活動を通じて、速さ、強さ、高さを表現する。	ニュアンスを含めたいろいろな角度から音楽を体現して、音楽的基礎能力を育む。	カノン、複リズム、補足リズムなど、より高度な課題に取り組み、音楽的感性の向上を図る。
社会性	お母さん以外の、先生やお友達の存在に気付かせ、一緒に活動することに慣れる。	集団生活におけるルールが存在を認識させ、それらを遵守する大切さを教える。	良好なグループ活動の維持に必要とされる、自制心や協調性の“めばえ”を促す。	活動への積極的な参加と素直な自己表現を促すことで、豊かな個性作りの素地を整える。	外界からの刺激を即座に吸収、消化して、環境の変化に柔軟に対応できる心を育む。
知育	好奇心の発芽を促し、思考力の基礎を養う。	物の名前や数に親しむ。	数と音楽との結びつきを体験する。	教具を使って数の概念を理解させ、読み・書きの基礎力を高める。	読み・書き・打つ・歩くなどの活動を通じて、理解力・記憶力・再現力を培う。
親子	一時もお母さん無しではいられません。指導は、お母さんを通して子どもたちへ伝えるようにします。	“親子のコミュニケーションを主としながらも、お母さんへの依存度をじょじょに軽減していきます。	活動におけるお母さんの主導権を薄めつつ、子どもの主張を補佐するサポーターとして、自立への手助けをしていただきます。	友達との活動が中心で、お母さんは、危急時におけるアドヴァイザー的存在として、控えていただきます。	

・年齢にあっていないために興味がもてない
レッスン

これらは、同年齢を指導している際にも起こりうる指導の失敗例であるが、異年齢児指導においても同じことが言える。異年齢児指導では、より綿密にレッスン計画を立て、手短な説明で、テンポ良くレッスンを進めていくことが、重要となってくる。指導計画はクラス内で最も多い年齢層か、それより下の年齢層に合わせて作り、レッスンは短い時間で活動を切り替え、幼児を飽きさせないように心がけたい。クラスで最年少の幼児に対しては、難しすぎない活動を設定し、指導者が適切な言葉がけで活動を促す。また、クラスの年長者にとって易しい活動の場合は、指導者がより発展した活動を促し、クラスの手本となるように導くことができれば、クラス全体に良い影響を及ぼすことができるだろう。

4. まとめ

異年齢児のレッスンでは、そのクラスの最年少児または最年長児の行動が、クラス全体の活動に影響を及ぼしていることが明らかになった。最年少児の行動が、最年長児を「赤ちゃん返り」させ、最年長児の行動が、最年少児の行動に影響を及ぼすこともある。

異年齢児の指導において、指導者は、各年齢の特徴やリトミックにおける指導指針を理解し、各幼児の指導目標を定めておく必要がある。その上で、指導計画を綿密に立て、短時間で活動を切り替えながら、テンポ良くレッスンを展開させていくことが、円滑にレッスンを進めることができる秘訣なのではないだろうか。

異年齢児のリトミック指導は、指導目的を

定め、誰を対象に行うかが非常に難しい。一方、指導者が指導書通りの指導をすると、かえって子どもの表現に対する柔軟性が失われ、本来のリトミックで育まれるはずの表現力や創造性が失われてしまうこともある。指導者自身が柔軟に対応していくことが、異年齢児の指導において、重要ではないかと筆者は考える。

注

- 1) 本稿では、特定非営利活動法人リトミック研究センターの指導法、指導書を使用する。
- 2) 不定期で、振替で他の曜日のレッスンを受講している生徒が入ることがあった。
- 3) レッスンでは、特定非営利活動法人リトミック研究センターのハンドサインを使用した。
- 4) 三森桂子、谷田貝公昭『音楽表現』東京：一芸社、2010年、28～31頁。原文のまま。
- 5) リトミック研究センター研究室『指導システムにおけるStep1～5の指導指針』東京：リトミック研究センター研究室、2015年。
- 6) バンドゥレスパー、エリザベス『ダルクローズのリトミック』(Elizabeth Vanderspar, *Dalcroze Handbook*) 石丸由理記、東京：ドレミ楽譜、1996年、19頁。

【参考文献】

- ジャック＝ダルクローズ、エミール『リズムと音楽と教育』(Emile Jaques-Dalcroze, *Le Rythme, La Musique Et L'Éducation*, 1965) 山本昌男訳、東京：全音楽譜出版社、2003年。
- ジャック＝ダルクローズ、エミール『リトミック・芸術と教育』板野平訳、東京：全音楽譜出版社、1986年。
- 三森桂子、谷田貝公昭『音楽表現』東京：一芸社、2010年。
- バンドゥレスパー、エリザベス『ダルクローズのリトミック』(Elizabeth Vanderspar, *Dalcroze*

Handbook) 石丸由理訳、東京：ドレミ楽譜、
1996年。

リトミック研究センター研究室『指導システムにお
けるStep1～5の指導指針』東京：リトミック
研究センター研究室、2015年。